

平成29年度 日本大学スポーツ科学部個人研究費 研究実績報告書

所属: スポーツ科学部 競技スポーツ学科

資格: 准教授

氏名: 今野 広紀

研究課題		甲状腺がん手術適応患者における予後因子の検討
報告の概要	研究目的及び研究概要	<p>本研究では、甲状腺がん手術適応となる、退院時転帰が「軽快」の患者の予後因子について、入院時併存症・入院後合併症の発症の有無が、在院日数にどのような影響を与えているかを推定することを目的とする。</p> <p>甲状腺がんは、わが国の好発年齢は30歳～50歳代であり、小児や若年層にも発生する。腫瘍部位が頭頸部にあるため、部位が限局的であっても予後が慎重に診断される疾患であり、副傷病を発するか否かが患者の予後に大きな影響を与える。</p> <p>本稿では、入院時併存症、入院後合併症として、「頸部リンパ節転移」「カルシウム代謝障害」「術後甲状腺機能低下症」の3疾患を在院日数の長期化因子とし、Konno(2014, 2015)同様に、多重回帰分析と生存期間分析によって、これらの疾患の発症の影響を推定する。</p> <p>この結果は、DPC樹形図の設計の妥当性の検証に寄与することが期待される。</p>
	研究成果	<p>在院日数の長期化因子として、他部位にがんを併発する高齢者が有力であり、特に頸部リンパ節転移の併発が因子となっていた。また、術後、新たに発症した疾患として、カルシウム代謝障害、術後甲状腺機能低下症の併発が在院日数長期化因子であった。</p> <p>回帰分析での推定結果は、すべてについて有意な結果が得られた。 Kaplan-Meier推定法による入院の累積確率を求めた結果では、「年齢が45歳以上の患者群」を除き、「頸部リンパ節転移あり群」「カルシウム代謝障害あり群」「術後甲状腺機能低下症あり群」の3つの副傷病の発生が予後の長期化因子であることがわかった。</p> <p>本稿の結果で示された疾患は、2014年度におけるDPC樹形図において定義副傷病に該当しないが、DPC樹形図上での入院期間の追加的見直しの必要性が示唆された。</p>
研究業績	<p>・論文および著書</p> <p>著者名・論文標題・雑誌名・査読の有無・巻・発行年・ページ数</p>	<p>①論文: Hiroki Konno「The assessment of prognosis factors in patients indicated surgery with Thyroid Cancer -the political assessment of adverse events after surgery」Health Policy, 査読あり</p>
	<p>・学会発表等</p> <p>発表者名・発表標題・学会名・発表年月日・発表場所</p>	なし
	<p>・その他</p> <p>*学会・競技団体報告書など 著書名・標題・掲載誌名 発表年月・発行所 *講演会, 研究会, 研修会, セミナー等での講演発表 発表者・発表年月・題目名・講演会名 *社会貢献活動等</p>	なし